The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	説文以前小学書の研究
Author(s)	福田, 哲之
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44388
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【40】

氏　　名	福　田　哲　之（ふくだ　てつゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17367　号
学位授与年月日	平成14年12月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学　位　論　文　名	**説文以前小学書の研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　湯浅　邦弘 （副査） 教　授　高橋　文治　　教　授　荒川　正晴

論　文　内　容　の　要　旨

字形分類による中国最古の字書とされる『説文解字』（略称「説文」）については、これまで、部首法や六書の原理を初めとする、その小学史上の意義が高く評価されてきた。しかし、『説文』成立に至るまでの小学書の状況については、資料的な制約もあって、ほとんど論及されることがなかった。

本研究は、既存の伝世文献に加えて、阜陽漢簡・敦煌漢簡・居延漢簡など新たに発見された簡牘資料を活用することにより、『説文』以前における小学書の成立や系統を分析し、中国古代における小学書の実態を解明せんとするものである。

第一篇「序論」では、『説文』以前の小学書の大部分が『蒼頡篇』と密接な関連を有し、『蒼頡篇』が、秦の始皇帝の文字統一に関わる資料であると同時に、『説文』以前の字書史を解明する上にも重要な位置を占めることを明らかにする。また、研究史を概述し、20世紀以降に発見された漢代小学書簡の意義と研究上の問題点を明らかにする。

第二篇「阜陽漢簡『蒼頡篇』研究」では、敦煌・居延漢簡『蒼頡篇』との比較から、阜陽漢簡『蒼頡篇』が本文・形式の両面において秦本に基づくテキストと見なされること、また、『蒼頡篇』には、多分野にわたる事物の分類形態や重層的な連文構造による訓詁的機能を反映した文字排列が認められ、後代の各種字書に通底する多様な萌芽的要素が見られることなどを明らかにする。

第三篇「敦煌・居延漢簡小学書研究」では、敦煌・居延漢簡から検出された小学書簡の集成と釈読とを試み、それを踏まえて敦煌・居延漢簡における『蒼頡篇』『急就篇』の年代について検討を加え、大まかに見て『蒼頡篇』の年代は西漢末以前、『急就篇』の年代は西漢末から新以降と推定されること、『急就篇』成立後、比較的短期間のうちに識字書の中心が『蒼頡篇』から『急就篇』に移行したと見なされることなどを指摘する。

その『急就篇』について、第四篇「『急就篇』諸本の研究」では、漢代から北魏の時代にまで視野を拡大し、諸本の系譜関係、吐魯番出土『急就篇』古注本の性格、漢簡『急就篇』と伝世諸本との関係などの検討を通して、テキストの変遷の過程を明らかにする。

以上の検討結果を踏まえ、第五篇「『説文』以前小学書の系統とその展開」では、『説文』以前の小学書について改めて総合的な検討を加え、これらの小学書が『説文』の成立にどのように関わったのかという観点から、『説文』前史の解明を図る。ここでは、『説文』以前の小学書の大部分が『蒼頡篇』と密接な関係を持ち、それらが改編書・続成書・注釈書の三系統に分類されること、改編書系統に属する『急就篇』が収録字種の面以上に、学習効率を高めるための形態上の整備を重視するものであったと見なされること、続成書系統に属する『訓纂篇』が『急就篇』の如き

速成・簡便な識字課本とは性格を異にし、古学派の立場から当時の小学の成果を集成した小学書として位置付けられること、などを明らかにする。そして、『蒼頡篇』を初めとする小学書の事物分類的形態や『蒼頡篇』の正読に関わる訓詁注釈が、『説文』の六書の理論や部首法を成立させる一因になったとの重要な見解を提示する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、阜陽漢簡『蒼頡篇』、敦煌・居延漢簡小学書、『急就篇』諸本などの分析を通して、『説文』以前の小学書の成立と展開、およびそれらが『説文』成立に与えた影響を解明せんとする意欲的な研究である。従来、『説文』以前の小学書に関する体系的研究は、ほとんどなされることがなかった。それは、『説文』が部首法という新たな体系の下に凡そ九千字に及ぶ漢字の形・音・義全般にわたって考察を加えた初の字書であり、いわば突出した存在として意識されてきたこと、『漢書』芸文志に著録された小学書の大半がその後亡佚し、『説文』以前の小学書の実態を知り得る資料が極めて乏しかったことなどによる。

これに対して、本論文は、『説文』の意義をやはり高く評価はしながらも、『説文』が小学史上に突如現れたのではなく、『蒼頡篇』『急就篇』を初めとする小学書の存在に導かれながら発展的に成立したとする。また、その過程を、敦煌漢簡・阜陽漢簡などの簡牘資料を丹念に読み込むことによって解明した。その着想は新鮮で、論証も極めて堅実である。特に、『説文』以前の小学書が『蒼頡篇』と密接な関係を持ちつつ、改編書・続成書・注釈書の三系統に分岐しながら発展していったとの指摘や、またそれら各々の要素が『説文』の六書や部首法を誕生させる契機になったとの見解は、従来の『説文』研究には窺うことのできなかった重要な論点である。

また、第三篇・第四篇に端的に見られるように、本論文は、断片的に公開されつつある簡牘資料を独自に集成し、簡牘資料と伝世諸本との詳細な校合結果を提示するなど、字句の異同や版本の系統についての重要な基礎資料を提供している。近年、簡牘資料の発見・公開が相次いでいるが、本論文の成果は、こうした新出土資料研究の進展という観点からも高く評価できる。

もっとも、竹簡の連接を検討する手がかりの一つとされている句末の押韻についての認定や、吐魯番出土『急就篇』古注本の資料的価値に対する認識などには、なお再考の余地も残されている。また、根幹的な資料となっている阜陽漢簡『蒼頡篇』の公開は、なお一部に止まっており、断片的資料を繋ぎながら慎重に考証を進める本論文は、その意味で隔靴掻痒の感を否めない部分もある。

とは言え、本論文は、これまで試みられることのなかった『説文』成立に至る過程を解明する画期的研究であり、また古代文字史・思想史・文学史など周辺領域の研究に与える影響も極めて大きいものがあると評価できる。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。